

ヘヤカブリダニを活用した施設栽培のメロンにおけるミナミキイロアザミウマ防除の検討

静岡県農林技術研究所 よしざき 吉崎 すずか 涼花・どい 土井 まこと 誠・さいとう 齊藤 ちはる 千温

はじめに

ミナミキイロアザミウマ *Thrips palmi* Karny は、体長 1 mm ほどの微小害虫で、キュウリ、メロン等のウリ科果菜類や、ナス、ピーマン等のナス科果菜類の重要害虫である（河合，2001；図-1）。本種の各種薬剤に対する感受性低下個体群が多数報告されており、安定的な防除効果を示す薬剤が少ない状況にある（柴尾ら，2007；鈴木・松田，2010；石川ら，2016）。メロンにおいて本種は葉や果実を吸汁するとともに、メロン黄化えそウイルス Melon yellow spot orthotospovirus (MYSV) を媒介する（KATO et al., 1999）。静岡県ではガラス温室を利用した温室メロンの栽培がさかんで、複数のガラス温室で定植時期をずらしながら 1 年中栽培されているため、病害虫の一掃が難しく、頻繁に薬剤が散布されている。このような栽培環境下で、薬剤感受性が低下している本種に対して高い防除効果を期待できる農薬は少なく、農薬に過度に依存しない IPM 技術の開発が求められてきた。その一つとして、スワルスキーカブリダニ *Amblyseius swirskii* Athias-Henriot の利用技術（増井，2011）が開発されたものの、天敵と併用可能な薬剤が限られることや、年間作付け数が多いメロンでは天敵の導入費用が高額となることなどから、普及は一定数にとどまっている。一方で、スワルスキーカブリダニ等の天敵製剤以外に、土着カブリダニ類もミナミキイロアザミウマの防除に活用できる可能性が指摘されている（古味，2009）。筆者らは静岡県内の複数のメロン栽培温室内で、ミナミキイロアザミウマ 1 齢幼虫を捕食するヘヤカブリダニ *Neoseiulus barkeri* (Huges)（古味ら，2008；図-2）の発生を確認しており、これらの温室では薬剤散布を主体とした防除を行っていることから、ヘヤカブリダニは多くの薬剤に対して感受性が低い可能性がある。また、土着



図-1 ミナミキイロアザミウマ成虫

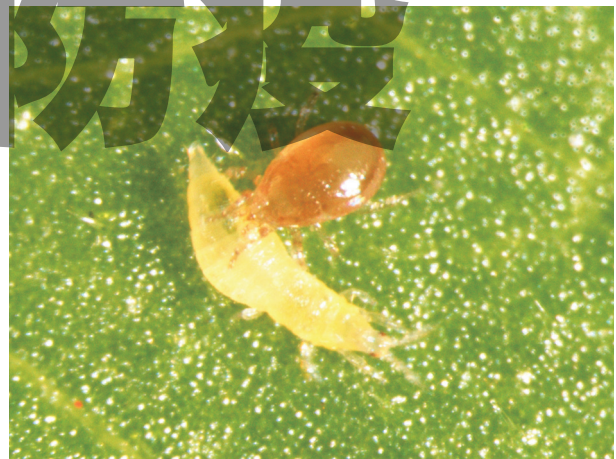


図-2 ミナミキイロアザミウマ幼虫を捕食するヘヤカブリダニ雌成虫

のヘヤカブリダニを生産者自身で増殖・維持し、ミナミキイロアザミウマに対する天敵として活用できれば、天敵導入費用の低減が期待できる。本稿では、このヘヤカブリダニを活用したメロンにおけるミナミキイロアザミウマ防除の可能性について、ヘヤカブリダニに対する各種薬剤の影響評価や代替餌の検討と併せて報告する。

I 各種薬剤に対する影響評価

天敵を利用した IPM を構築するうえで、天敵に対する薬剤の影響の有無や程度の把握が必要である（大井田，

Efficacy of the Release of *Neoseiulus barkeri* for Controlling *Thrips palmi* in Greenhouse Melon Cultivation. By Suzuka YOSHIZAKI, Makoto DOI and Chiharu SARRO

（キーワード：ミナミキイロアザミウマ，メロン，ヘヤカブリダニ，生物的防除，IPM）